

氏名	周 霞
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 6433 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	井上靖の歴史小説 ——『敦煌』における歴史的要素に関する研究を通じて——
学位論文審査委員	教授 田仲 洋己 教授 山本 秀樹 准教授 橘 英範 准教授 西山 康一 准教授 土口 史記

学位論文内容の要旨

本論文は、昭和戦後期を代表する作家の一人である井上靖（1907～1991）の歴史小説『敦煌』を研究対象として、その舞台や人物の設定、細部の叙述がどのように組み立てられているのかということを実証的に分析するものである。併せて、井上靖の歴史及び歴史小説に対する見解を、井上と大岡昇平との間に交された所謂「蒼き狼論争」を中心に検討する。

中国西域を題材とした歴史小説『敦煌』は、井上靖の代表作の一つに数えられる。本作に関する先行研究には、主人公趙行徳をはじめとする登場人物の造形に関する論、小説の文体に関する考察、井上が影響を受けた松岡譲『敦煌物語』との比較等の研究がある。しかしながら、作中における細部の設定や描写を井上の参照した諸関連文献における記述と細かく照し合せて比較、検討するような作業は、まだ着手されていない。本論文では、主人公趙行徳の人生や遍歴を辿り直す形で本作に鏤められた歴史的要素に関する叙述や描写を諸史料の記事と比較対照し、井上の歴史小説の作法を解明することを目的とする。

序章では、まず、敦煌の地の歴史、敦煌学の興起と発展に関する情報を確認し、それが井上に及ぼした影響について検討する。その上で、井上自身が発表した様々な文章の記事に即して、『敦煌』創作時の参考文献を確認し、その一覧表を作成する。また、『敦煌』発表当時の同時代評及びそれ以降の本作に関する評論と研究の概要について叙述し、本論文の研究の方向性を確認する。

本論部分に相当する第一章から第五章では、作中に現れる具体的な歴史的要素を取り上げ、諸関連文献との共通点、相違点及び相互の関連性について考察する。第一章では、物語の最初の舞台開封をめぐる、宋代の科挙の実態と開封の都市風景の二点について考察する。宋代の科挙に関して

は、宮崎市定の著作『科挙』と荒木敏一の科挙に関する論文を比較対象として検討する。科挙の様々な設定について史実に即した叙述が為されているが、吏部試験と殿試の口頭試問については宋代の科挙の実態には即しておらず、主人公の造形を際立たせるための創作行為として理解する。開封の都市風景に関しては、『東京夢華録』を主な比較対象とし、開封の街路並木の「榆」、趙行徳が寄寓していた西華門付近の都市内における位置付け、開封の街の賑やかな描写等について確認する。

第二章では、趙行徳が軍人に変身する場所として設定されている涼州をめぐる、藤枝晃の論文「沙州帰義軍節度使始末」と『宋史』に基づき、河西地方と涼州の歴史的、地誌的な概要及び同地名産の馬の持つ意味の二点に焦点を当てて考察する。河西地方と涼州の概要に関しては、河西地方の状況、涼州の位置、宋代における同地の政治的情勢や民族等に関する情報を確認する。涼州産の馬に関しては、同地の馬をめぐる争奪戦、及び主人公趙行徳の部隊での役割が馬に関わる形で設定されていることの意味について検討する。

第三章では、物語の進行を導く役割を担う西夏をめぐる、西夏王李元昊の人物造形と西夏文字について考察する。李元昊の人物造形については、『続資治通鑑長編』と『宋史』の記事を比較検討の対象とし、何亮の安辺策、李元昊の身長・性格、李元昊の父李徳明の没年、軍事を中心とする西夏の国政等に関する叙述について考察する。西夏文字に関しては、言語学者西田龍雄と井上との関係、及び西田の西夏文字に関する研究の内容を確認し、西夏語と漢語との対照単語集である『番漢合時掌中珠』が本作に取り込まれていることの意味や、同書の記事と小説の記述との細部の照応について検討する。

第四章では、本作の登場人物で于闐王族の後裔と称する商人「尉遲光」をめぐる、于闐の尉遲一族と尉遲隊商の旗印の二点について考察する。尉遲一族に関しては、藤枝晃の「沙州帰義軍節度使始末」の論述をはじめ、『旧唐書』『新唐書』『宋史』における尉遲王族及びその王李聖天に関する記事内容を確認した上で、尉遲光の人物設定の意味を考察する。尉遲隊商の旗印に関しては、玄奘の『大唐西域記』、宮崎市定の「毘沙門天信仰の東漸に就て」という論文、寺本婉雅の『于闐国史』における于闐と毘沙門天の淵源に関する記述を確認して、小説内における描写の意味を探る。

第五章では、小説後半の舞台となる瓜沙二州をめぐる、沙州を支配した帰義軍節度使と敦煌の地における仏教興隆の実態について考証する。沙州帰義軍節度使に関しては、藤枝晃の論文「沙州帰義軍節度使始末」における論述を主な検討対象とし、漢人コロニーとしての特徴、瓜州降参の経緯、瓜州太守「延恵」の名前の設定の意味について考察する。敦煌仏教に関しては、上述の藤枝論文と敦煌の僧尼籍、塚本善隆の論文「敦煌仏教史概説」に基づき、敦煌の仏教が隆盛を極めた実情を確認する。具体的には、仏洞を開鑿する人の身分、仏洞や寺院の数及び名称、諸寺院の格式と相互の関係、于闐王と曹氏一族との関係等について検討する。

終章においては、小説『敦煌』の作品世界に関する上記の考証と論述を踏まえた上で、まず、井上の最初の歴史小説『漆胡樽』の内実と時代的意義について考察する。そして、歴史の意味と史料の扱いをめぐる大岡昇平と井上との間で展開された所謂『蒼き狼』論争の経緯の詳細を紹介し、両者の歴史小説に対する認識と歴史観の相違について検討する。最後に、本論文全体の締め括りとして、井上靖の歴史小説の作法を再確認する。小説の世界を形造る様々な歴史的要素に関しては、

井上は多様な史料や先行研究の成果を参照しつつ極めて考証的な態度で臨んでいるが、登場人物の造形や物語の進行に関しては、小説作品としての効果を狙って史実を離れての部分的な脚色を厭わない場合があることが確認されたと結論付ける。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2021年2月10日、学内審査委員5名によって行なわれた。専攻分野による内訳は、日本文学関係教員3名、中国文学関係教員1名、中国史学関係教員1名である。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、以下のような結論に達した。

審査委員が評価できるとした主要な点は、以下の如くである。

- (1) 序論と本論部分に関しては研究の理念と方法が明確であり、論証の手順も適切、妥当である。序論においては、まず本論部分の考察の前提となる敦煌の地の歴史、敦煌学の興起と発展に関する情報を整理して、それを年表の形で提示する。また、研究対象である小説『敦煌』及び作家の井上靖に関する基本的事実を確認する。井上や『敦煌』を対象とする研究文献にも広く目配りし、『敦煌』や井上の歴史小説についての従来の研究史を十分に理解した上で論述を進めている。総じて、実証的な文学研究の手続きと方法論をよく身に付けていると評価される。また、文学関連の資料にとどまらず、中国史・西域史や仏教史に関する一次史料や研究論文等についても積極的な活用を図り、小説『敦煌』が舞台とする宋代の社会や西域の政治的、文化的状況についても十分な理解を持った上で、考察を進めている。
- (2) 本研究の出発点は、井上自身が書き遺した本作の成立経緯に関する心覚え的な文章であるが、そこに名前を出て来る研究者の事績や論著を逐一確認するのみならず、探索の幅を広げて明治末年から昭和戦前期に至る中国史学・西域学の研究成果についてよく理解し、自身もそれらの論著に実際に目を通した上で考察を進めている。
- (3) 母語である中国語で書かれた一次資料の読解能力を生かして、『宋史』や『東京夢華録』をはじめとする諸史料の記事を自在に論述に活用するのみならず、中国側の研究成果をも摂取できる利点をもよく活かしている。
- (4) 第一章から第五章にかけて、小説『敦煌』の細部の設定や叙述を歴史資料や歴史学研究成果等と照合して検討を進める作業は、極めて厳密かつ実証的に進められており、論述も安定している。緻密な検討作業を経た結果、井上の考証的な態度と作家としての独自の工夫の在り方が解明されているが、とくに、井上が同時代の京都大学系の東洋史学・西域学の研究成果を積極的に利用することとどまらず、『宋史』をはじめとする一次史料にも丹念に目を通し、その記述を小説の舞台設定に利用していた事実が明確に裏付けられたことは、研究史上の意義も大きいと評価される。当該の研究内容の一部については、井上靖の全国的規模の専門学会として実績がある「井上靖研究会」において口頭発表を行い、また、同研究会が発行している学術雑誌『井上靖研究』に二度に亘って論文を発表するという実績を挙げている。

(6) 終章では、井上の歴史小説観について、森鷗外以来の歴史叙述と歴史小説をめぐる議論を踏まえた上で、一応の考察結果が示されている。

(7) 日本語の文章にほぼ破綻がなく、全体を通じて安定した論述が為されている。

・ 以上のような評価を得ながらも、その一方で、以下の如き幾つかの問題点や残された課題についての指摘も為されている。

(1) 論文の冒頭に小説の背景となる敦煌及び敦煌学・西域学に関する情報が掲載され、その後に井上靖と小説『敦煌』に関する説明が置かれているが、本論文の研究対象は小説『敦煌』なのであるから、この掲載順序は逆にして、論文全体の構成を修正すべきである。

(2) 序章において、明治末年から昭和戦前期に至る敦煌学・西域学の研究成果が年表形式の一覧表で示されているが、細部の記載にやや不十分な点があり、より情報を収集、確認して、敦煌学・西域学の展開をより精細に跡付けるべきである。

(3) 歴史資料を幅広く活用している点は評価できるが、史料の性格や内実あるいは井上の時代における日本側の受容の在り方をより明確に把握した上で、当該史料の利用可能性について検討すべきである。

(4) 小説の細部の叙述や舞台設定に、中国の伝奇小説や説話の発想、描写に近似した部分があり、その受容の可能性についても検討する必要がある。

(5) 歴史資料や史実と異なる叙述や設定が小説内に見られる場合、それを作家としての意図的な操作、意識的な創作行為と考えるか、それとも井上の側の或る種の錯誤に基づくものと理解するか、その判断については慎重を期すべき箇所があるかもしれない。

(6) 第一章から第五章に至る本論部分に比して、終章の論述が同等の水準に達していない。例えば、大岡昇平との間に交された所謂『『蒼き狼』論争』についての分析が、その経緯を追跡する表層的なレベルに留まっていて、その文学史的意義が十分に解明されていない。これは、論争の当事者である大岡昇平自身の小説観や文壇的立場、歴史小説をめぐる近代諸作家の様々な営みについての理解が不十分であるためで、日本の近代文学史全般に関するより幅広い知識の涵養が、今後求められるところである。

(7) 上記(6)の指摘とも関わるが、歴史学や歴史叙述、歴史小説の本質に対する考察を十分に行わない地点から分析を進めていることが、終章の論述を底の浅いものにしていく大きな要因である。しかしながら、これは極めて大きな問題であり、今後の研究者人生を通じて申請者が向合い、取り組むべき課題であると理解されるので、今後の努力と精進に期待したい。

上記のような欠点や課題があるものの、第一章から第五章に至る本論部分の研究史的な価値は高く、全体として学位論文の水準には十分に到達していると判断される。井上靖という作家は、生前は昭和戦後期を代表する作家として旺盛な活動を展開し、晩年にはノーベル文学賞候補に擬される等文壇的な地位も極めて高かったが、没後は、例えば井上の翌年に亡くなった松本清張に比して、やや影が薄くなっていった印象がある。その一方で、中国や西域を舞台とした歴史小説を多数遺していることもあって、芥川龍之介研究ほどではないにせよ、近年は中国側の研究業績が目につく状況

呈している。没後 30 年を経て日本国内においても見直しの機運がやや生じているかに思われるこの作家の研究に新たな 1 ページを加え得る、質量ともに充実した研究として、本論文を評価することが可能である。

審査委員会は、以上のような諸点を総合的に判断し、本論文を岡山大学の博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。

以上